二には、日本の人口の急速な膨脹の様子から見て、満洲の資源だけでは到底これをまかなって行けるものでないし、しかも人口問題に対する政治家の関心の甚だ薄い点から見て、これをこのまま委せて置くわけには行かない、何とか新しい手を考えなければならない、という焦慮を感じはじめた事である。これは昭和十年の夏、石原が仙台の歩兵第四連隊長をしていた時の話である。こういう事情から、石原は華北の豊富な資源に目をつけはじめていた。彼は山西省の鉄や石炭の無尽蔵なのに目を瞠った。しかしこの時代の彼は、列国がそれぞれ国内事情に制約されている今のうちに、所謂ドサクサまぎれに華北を手に入れてしまおうという、軍事行動論者であった。ところがそこへ、陸軍の計画中に全くない蘆溝橋の戦闘が勃発して、シナ事変という長期の戦争に突入してしまったのである。これは彼にとってまことに予定外の出来事であった。

頭のひらめきの早い彼は、咄嗟の間に大手術による解決を決心した。このような時期に中国と戦争をやって大切な兵力を消耗するほど馬鹿げた事はない。この戦争は一旦はじまれば十年戦争になる。これを回避するためには、全中国人の反感の原因になっている満洲国成立のいきさつを一気に白紙に戻して、満洲国の領土権を中国に返すことによって日本の誠意を示すと同時に、その代案として満洲、熱河、華北を通じての広い天地に、平等な経済合作地帯をつくって行くほかはない。そしてこの日本の誠意を如実に示すために、近衛首相は自ら南京に赴いて蔣介石と直接話し合いをつけるがいい。——こういう案を石原は立てて、近衛首相にはげしく逼ったのである。近衛も石原の信念と情熱には動かされた。物事をなかなか決断しない近衛も珍しく飛行機を用意して腰を持ち上げるところまで行った。しかしこういう派手な飛躍というものには、とかく反動の起りやすいものである。果せるかな、陸軍部内に先ず常識論的な反対がわき起った。腰をもち上げかけた近衛は躊躇して、南京行きを中止した。あとで石原は、同じ陸軍のなかの面従服背の徒にしてやられたと口惜しがった。彼は、陸軍部内の、主として統制派に属するシナ膺懲論者から脊負投げを喰らったのである。

しかしともあれ、この出来事は側面から言うと、石原が満洲国育成という忍耐の要る仕事に、多少なりとも熱意を失ったことを物語るものである。実のところ、彼は大きい幻滅を感じたのである。彼は満洲国をつくる際には、文字どおりの各民族平等協和の新世界を夢みていた。そして、昭和初期の軍人が必ず一度は洗礼を受けたと同様に、彼もまた、天皇を中心とした国家社会主義の実現を決意していた。三井三菱のような資本家をつぶして富の平等な分配を行なうことを考えていた。軍縮によって圧迫を受け、官吏の減俸によって生活を脅やかされたうえ、電車一つに乗っても軍人は一般の国民から冷たい視線を向けられる。——このような社会状勢を放って置けない気持であった。一方、政治家は茶屋酒を飲んで賄賂をとる。そのくせ資本家からは資本利子税も収益税も徴収する気はない。勿論、最大の懸案である人口問題、失業の問題、こんなものは誰ひとり省みない。これでは駄目だ。これはひとつ若い将校たちと共に世界政策の研究に手をつけて、内政問題をも含めて政治の根本の建て直しからやり直そう。——こういう決心を石原がしたのが昭和八年の頃であった。

元来、石原は極貧にあえぐ東北の農家の出身であった。一毛作の生活苦に圧しつぶされた純朴な貧農の生活に涙を感じている、郷土の善良な息子であった。この郷土的な背景は、他のいかなる背景よりも強いものであった。そしてこういう階級の眼の持ち主である石原から見ると、満洲国の実情には当然多くの不満が生じて来る。第一に五族平等ではない。日本人が威張っている。内地の階級差のかわりに、そこには民族の不平等がある。資本導入も元の李阿弥であって、強力な内地の財閥の資本が水の低きにつくように入って来ている。官庁の認可許可のやり方も、宴会のやり方も、情実のやり方も、内地と少しも変っていない。変っているのは満洲国の官吏が一様に詰襟の制服を着せられているファッションの様式ぐらいのものである。これでは何にもならない。こんな状態よりは蔣介石その人と話をつけて、満洲華北一帯の広大な新天地に平等合作の舞台を創造する方がマシである。——こう考えた石原は、無尽蔵の資源を基礎にして就業の喜びにかがや

く日本人と中国人の青年の顔が今から眼に見えるようであった。——しかしこの石原構想は失敗した。

失敗したのにはそれだけの原因がある。石原は先ず総理大臣の近衛をつかまえて、膝詰め談判をするというような派手な手段を用いた。これが軍人としてはそもそも間違いのもとであった。それに、決断力に乏しい近衛の性格研究不足も石原の責任である。そんなやり方でなく、石原が統帥事項の責任者たる参謀本部第一部長として、閑院宮総長を通じて中国への出兵反対の帷幄上奏を地味に行えば、当時の宮中の平和愛好の空気から言っても勅許は容易であったのだ。石原はこの道を選ばず、最も政治的な手段を好んで採ったために、騒ぎばかり大きくなってしまった観がある。要するに彼はあまりに政治が好きであった。

しかし石原がこのように派手な行動で政治的に動く場合、近衛はいつも相対的にこれを訂正する尺度をひそかに懐中に入れていた。近衛は実は石原よりはこの尺度の方を信用していた。その尺度というのは他ならぬ陸軍の皇道派である。もともと、近衛が皇道派から影響を受けた対ソ警戒の思想の淵源は、彼の青年時代以来の年久しいものであった。交友関係の目まぐるしいまでに次ぎ次ぎに変って行った近衛にしては、珍しくソ連通の多い皇道派の将官たちとの親交は、生涯を通じて一貫していた。従って石原の抱く満洲華北一帯の親善合作の構想も、それがソ連の南進防止に役立つ限りに於て近衛の関心を惹くのであって、役立たぬとなれば近衛は忽ちソ満国境強化論一点張りに立ち戻るのである。ところが、皇道派の将軍たちは石原をあまり信用していなかった。言い換えれば、石原の天才的な性格から生れる思想上の気まぐれには、あまり信をおいて居なかった。それに、二・二六事件なぞの際にあらわれた石原の言動に対する強い批判も加わっていた。こんな訳で、石原の構想に関しては、常に大きい批判勢力が部内にわだかまっていた。

話が外れてしまったが、石原の軍事予算要求のやり方も同様、石原らしい誤りを犯している。石原はシナ事変拡大を意味するような軍事予算には、作戦部長としてあくまでも反対であって、断じて承認の印を押さなかった。それはそれで大変よいのだ。ところが彼は同時に、ソ満国境防備強化のために初年度の経費三十

億を要求し、それのみならず、更に第二年度にはおそらく七十億に達するだろうと言われる要求を用意していた。これは当時の陸軍省の初年度要求額二億七八千万円から見れば、ほとんど天文学的数字のような印象を与えるものであった。なるほど石原の構想から言えば、ソ連が南進の野心を起す余地のないくらいに満洲華北にかけて日華合作の新地域を創造し、さらにその裏づけとしてソ満国境を軍備的にもしっかり固めておいて、ソ連をして平和を維持するより他には手段がないようにあきらめさせる着想であって、たしかにすぐれた雄大な一見識である。ところが、軍備というものは元来の性質が両刃の刀であって、使い道によっては柔にも剛にもなるものであるから、ここに石原構想反対派の疑念が生じるわけである。果然、反対派の或る者は石原のこの予算要求を目して不可能を強いるものだと言い、他の者は甘言を用いて予算を獲得して置いて、実は対ソ開戦の準備をすすめるのだと言い、議論百出で収拾がつかない。ところがこういう場合、石原に代って合理的に説明をする者が、案外に石原門下にはいないのである。否、平素から全く養成してないのだ。要するに石原は天才型であり過ぎて、同じ思想の同僚や後輩というものを、始めから作っていなかった。むしろ最も忠実な同調者は、兄貴分の多田中将一人であったのではあるまいか。この辺に天才型の人間の弱点があった。フランスの天才なぞに時おり見受けられる孤高なタイプの弱点である。軍務局長の町尻少将なぞは当時「石原は神様だなあ」と歎息したそうであるが、それは石原の構想のあまりにも飛躍的な事と、そのために普通人である下僚が後始末にも一々骨の折れる事を、苦笑をもって批評したものであった。

石原が参謀本部の作戦部長から職を転ぜられた後は、当然の事ながら統帥事項の権限——即ち作戦用兵の権限をまったく失っていた。新しい肩書の関東軍参謀副長というと、聞えはいいが、実は満洲国育成に関する政務がその大部分を占めていた。しかし軍事予算に関する限りは、石原構想は或る程度受け入れられて、この点は一応面目を保ったのだが、それはソ満国境強化という一面のみが生かされた結果になった。ソ満国境の平和維持は牡丹江の師団長に多田中将が坐っている限りは大丈夫と噂されていたが、それにしても昭和

十九年にシベリヤ鉄道の補給線が新たに増設されるまでには、ソ連と一戦を交えなければなるまい、というのが真相であった。このために、前述のとおり、あの名高い関東特別演習――「関特演」と称する仮名のもとに――未曽有の豊富な軍事資材が沿海州の国境に向って集中せられて、到底専守防禦なぞで留まる形勢ではなかった。これが昭和十六年の夏の状態である。たとえば、牡丹江の第三軍には優秀な連隊長大隊長が各軍団から選り抜かれて勢揃いをしているばかりでなく、その上には山下奉文、阿南惟幾の率いる二大覆面方面軍が控えて、着々として準備を整えていた。しかし、後世に陸軍の一大豪遊という言葉で厳しく批判されたこの布陣も、昭和十六年の末には対米軍事情勢の悪化のために空しく放棄せざるを得なかった。このようにして、石原の抱いていた切札――もしくは切札の変型したものは、次ぎ次ぎに一場の着想として抹殺されて行った。そして冒頭にも書いたとおり、彼は彗星のように長い光芒を引きながら短い年月のうちに消え去ったのである。

（石原莞爾を評する者は、必ず彼の晩年の東条首相に対する果敢な抗争を挙げる。そしてそれはたしかに石原の独擅場でもあったが、私から見れば、やはり彼の本領は用兵作戦の探究にあったので、この方に貴重な精力を傾けて貰いたかったと惜しむ一人である。）

揚子江は今も流れている

犬養健

著者略歴

○明治二十九年七月、犬養毅三男として東京に生まれた。
○学習院高等学部を経て、東京帝国大学文学部に学ぶ。
○昭和五年より現在に至るまで衆議院議員。
○その間通信参与官。中華民国派遣特派大使随員。日華和平条約折衝委員。外務政務次官。法務大臣。警察庁国務大臣。臨時外務大臣代理を歴任した。
○著書は「一つの時代」「南京六月祭」「家鴨の出世」新進作家叢書「犬養健集」等がある。

昭和三十五年九月十日　発行

定価　三八〇円

著作者　犬養健
発行者　車谷弘
発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷　大日本印刷
製本　矢嶋製本
製函　加藤製函

Printed in Japan

© 1960 Ken Inukai

東條英機と太平洋戦争　佐藤賢了

本書は「ダマレの佐藤」と異名をとった筆者が、東条大将の下に密接な関係にあった立場から大戦裏の真実の姿を初めて発表する秘録であり、貴重な資料でもある　二六〇円

流転の王妃　愛新覚羅浩

満州宮廷の悲劇

艶峨候爵家に生まれ、満州国皇弟の妃となった日本女性が、満州宮廷と運命をともにした苦難の半生と、愛嬢慧生さんを天城山に喪った切々と胸を打つ涙の記録　二六〇円

白い肌と黄色い隊長　菊地政男

金髪女性四千の命と貞操を守った一日本下士官の愛の記録。戦時下、セレベス島カンピリ敵国婦女子収容所に咲いた敵味方を越えたヒューマニズムの物語　二五〇円

日本の黒い霧　松本清張

戦後占領下日本に起った、下山事件、白鳥事件、造船疑獄事件、木星号遭難事件に真向から取り組んで、真相を描く推理作家の野心作　ラストボロフ事件以下続刊　二六〇円

お嬢さん放浪記　犬養道子

犬養木堂翁の孫娘が、チャッカリ十年間、欧米を一人歩きして物した抱腹絶倒の世界旅行記。近頃こんな面白い旅行記はなかったと大好評を博したベストセラー　二七〇円

軍閥興亡史　伊藤正徳

全三巻

日本陸軍の草創時代から、日清、日露の大勝利、昭和軍閥の形成と、軍国主義の発展、そして遂に破局の太平洋戦争に突入するまで、豊富な資料と名文で描く大作。　各三五〇円

文藝春秋新社